

再び恋に落ちたシェイクスピア

伊井直行

1 劇場の舞台袖。劇作家ジョン・フレッチャーが、共作者のフランシス・ポーモンと共に舞台を見ている。舞台では、男たちがやりとりをしている。

「結局、払うものは払って、気合いを入れようとしたんだ」

「それで、それで」

「なんと、乙女でもあるまいに、痛くしたら泣いちゃうから、だと」

観客席が沸く。フレッチャーが満足そうにポーモンの顔を見る。

「ほら、下ネタを入れて良かっただろ。客の食いつきが違う」

ポーモンは肩をすくめ、舞台袖から立ち去ろうとする。

「フランシス」

フレッチャーが呼びかけるが、ポーモンは歩みを止めない。

フレッチャーは苦笑いを浮かべて舞台に向き直る。視線は、大笑いしている観客席に向けられる。中でも、一人の男性に集中する。男性は連れの男性と一緒に笑っている。しかし、その笑いはどこか冷めているようでもある。

2 劇場出口。出ていく観客たち。先ほどの男性と連れがその中にいる。親しげに会話しながら歩く二人。後ろからフレッチャーが近づいて呼びかける。

「ミスター・シェイクスピア。ミスター……」

シェイクスピアが振り返る。フレッチャーの顔を見て立ち止まる。

フレッチャーは会釈する。

「ミスター・シェイクスピア、お越しいたゞき、ありがとうございます」

「久しぶり」

「ストラトフォード・アポン・エイボンにお帰りになったやに聞いていました」

「帰ったさ」連れの男性が口を挟む。「けれど、奥様の元では居心地が良すぎて、すきんだロンドンの町が恋しくなるらしい」

フレッチャーは連れの顔を見て表情を変える。片足を引いて頭を下げる。

「サウサンプトン伯……お越しいたゞき、光栄です」

サウサンプトン伯ヘンリー・リズリー。かつてシェイクスピアが愛のソネットを捧げた相手と噂される。ヘンリーはフレッチャーの言葉など聞こえない素振りです。歩いて歩き出そうとする。

フレッチャーがシェイクスピアにたずねる。

「芝居は、お気に召しましたか？」

ヘンリーは足を止め、振り返る。

「お気に召すわけないだろ。こいつが気に入るのは自分の芝居だけだ」

シェイクスピアは苦笑いで顔を左右にふる。

「だが、心配するな。ウィリアムはもう芝居は書かない。で、自分以外のクズの中では、ジョン・フレッチャー、お前とフランシス・ボーモントのコンビはましな方だとき」

ヘンリーが歩き始める。シェイクスピアが続く。なお話しかけるフレッチャー。

「ミスター・シェイクスピア、折り入って、ご相談したいことがあります」

シェイクスピアは歩みを止めない。

「ご覧の通り、サウサンプトン伯とつきあわねばならん」

「では、後日に」

シェイクスピアは返事をしない。

「週末、宮廷で国王一座による『ハムレット』がかかります。ご覧になる予定は？」
シェイクスピアの足が止まりそうになる。

「私は当日招かれて、というか、呼びつけられております」とフレッチャー。

「宮廷に招かれた？ 芝居のことですか？」とシェイクスピア。

うなづくフレッチャー。

「私も招かれてはいる。行くかも知れない。行かないかも知れない」

「必ず、お目にかかりたく存じます」

フレッチャーは立ち止まり、二人の後ろ姿を見送る。

3 劇場から続く賑やかで不潔な通り。シェイクスピアは早足でヘンリーに近づく。

「ハムレット、ハムレット……。なんで今更ハムレットなんだ？」

「俺にきいているのか？」

「いえ。ただ不思議だと思っております。あのように暗い芝居……」

「国王陛下のご所望らしい。陛下が、陰鬱な悲劇をお好みだと聞いたことはなかったが、なかなかの芝居通であることは確かだ。不思議ではない」

ヘンリーが続ける。

「ハムレットはシェイクスピアの最高傑作だと思う。お前は違うのか？」

「最高ではございません。最高の一つです」

「リア王はいい芝居だ。だが、結末がつらすぎる。ハムレットの死は観客を一つにする。だが、リア王は最後の最後に全員を孤独の内に放り出してしまおう」

「夏の夜の夢を見れば、みな幸福になれます」

ヘンリーは立ち止まる。

「喜劇で観客が幸福を味わうのは当たり前だ。最高の芝居は、悲しみの奥底で人に生きる価値を思
い出させる悲劇だ。ハムレットだ」

シェイクスピアが言う。

「最高の喜劇は最高の喜劇、最高の悲劇は最高の悲劇、比べることはできません」

「自分で喜劇を持ち出したのではないか……ならば、悲劇にして喜劇、流行りの悲喜劇こそが最高中
の最高だとも言うのか？」

「そうなれば、当然、当代悲喜劇の第一人者、ジョン・フレッチャーとフランシス・ボーモントのカップルこ
そ、イングランドの演劇史上、最高の劇作家にてございましょう」

シェイクスピアは深々と礼をする。皮肉な笑みを浮かべて。

ヘンリーはシェイクスピアの目を見る。

「ウィリアム、お前は自分で書いておきながら、ハムレットが嫌いなのか？」

視線を逸らすシェイクスピア。

「私はかつてハムレットを書きました。今の私は、かつてハムレットを書いたことのある男に過ぎません」
シェイクスピアは一旦、言葉を止める。ため息をついたようでもある。

「私は最早ハムレットを書けません。どうやって書いたのか、思い出すことすらできないのです。しかし、そ
れもどうでもよいこと。ハムレットは、私にとって、とうに消え失せた過去に過ぎません。それなのに、宮
廷は、まるで昨日書いた作であるかのようにハムレットを持ち出して来ました。迷惑千万です。まるで
失った恋人の残り香を無理にかがされるような……迷惑どころか、むしろ拷問です」

ヘンリーはシェイクスピアに寄り添う。二人は肩を並べて歩き出す。

4 フレッチャーとボーモントが同居する部屋。言い争う二人。

フレッチャー「宮廷から直に話が来たんだ。国王一座の座付き作者の筆頭になる千載一遇のチャンスなんだぞ」

ボ「モント」そりゃ結構な話だが、俺には関係ない。俺は二度と芝居に関わることはない。何度訊かれても同じだ」

フ「宮廷での公演の話は知らなかっただろう？ 俺だって今日初めて聞かされた」

ボ「俺には関係ない。宮廷からだろうと、同じことだ」

フ「お前にはそうでも、俺にとっては違う。ここでコンビを解消したら、せつかくのお招きが無になるやもしれん。最後の一度で構わない。今回だけは一緒にやってくれ」

ボ「無理だ。芝居の世界とは縁を切る。婚約者にそう約束した」

うつむくフレッチャー。

ボ「おまけに演目を指定されて、それがドン・キホーテとは、みくびられたもんだ。そんなもの、見世物にしかなるまい」

フ「みくびられたわけではない。俺がスペイン語ができて、英訳が出版される前からドン・キホーテを読んでいたと、そんな話を陪臣の誰かが聞いたようなのだ」

ボ「他の作者に断られて、お鉢が回って来たのだろう。おちゃらけた三文小説を元に劇を書きたいやつなんて、そうはいない。俺も以前に少し読んだことがある」

フ「すこぶる面白いだろ？」

ボ「そして、すこぶる下らん。お前は、ドタバタ喜劇の作者になりたいのか？」

フ「まさか。確かに、並の手腕ではまともな演目にはならない。だからこそ、フランス、お前の助けが必要なんだ」

ボ「無理。芝居に未練はない。俺は自分がシェイクスピアになれないと分かったんだ。ジョン、お前もだ。だが、お前はまだ希望を持っている。希望を持つ者に扉は開かれる……かもしれん。幸運を祈る」

シェイクスピアの名にびくりとするフレッチャー。フレッチャーが言葉を継ぐ前に、ポーモントはベッドに入る。フレッチャーは肩をすくめる。そして同じ寝床に潜り込む。二人は互いに背中を向け合って寝る。

5 深夜、シェイクスピアは居室に戻る。月明かりのさす窓辺での独白。

「俺はペンの持ち方を忘れてしまったも同然だ。ハムレットどころか、求めに応じて乱造した程度の作ですら、今は書けそうにない。麗しく、また禍々しい言葉を際限なく産み出した俺の頭の中の井戸は涸れ果てた」

月に目をやるシェイクスピア。

「あれはまさしく黄金の井戸だった。だが、なくなったところで惜しくはない。口から吐き出された途端、右から左に消えて行く空しい言葉の黄金など、最初からあってないようなもの。代わりに手で触れることのできる本物の黄金を手に入れた。俺はかねて劇作だけでなく、劇場の権利を手に入れるためにも精一杯力を尽くした。故郷に値上がりしそうな不動産があれば、稼いだ金を抜け目なく投資した。貧乏な劇作家連中は、そんな俺の生き方が理解できないようだった。今やみな俺の成功をうらやましがっている。言葉の黄金は本物の黄金にかなわない。フレッチャーが俺に相談したいのは、金の無心だろう。宮廷の陪臣に気に入られようとする金がかかる」

窓を閉めるシェイクスピア。

「それにしても、サウサンプトン伯がハムレットをお気に入りとは。以前はそうではなかった。ハル王子とフォルスタッフが好みだったはず。あの恐ろしい経験が、あの方のものの見方を根底から変えてしまったのかもしれない」

6 サウサンプトン伯の過去。シェイクスピアら芸術家のパトロンとして、華やかな生活。王宮での立身と策謀。反乱。武闘。虜囚となり、裁判を受ける。かろうじて命は助けられるが、ロンドン塔幽閉の身

に。牢内で猫をなでるサウサンプトン伯。エリザベス女王の死。ジェイムズ王により解放され、地位を回復。シェイクスピアとの再会。

7 王宮内。ハムレットが始まろうとする頃、シェイクスピアが現れる。最後方の立ち見の中に紛れようとするが、王の従者によって最前列の一席に誘われる。王の視線に気づき、頭を下げるシェイクスピア。王の後方からその様子を見ている青年。横に、顔を隠した妙齡の婦人。婦人もシェイクスピアに視線を向け、見つめる。

8 ハムレットの舞台とシェイクスピアの顔が交互に。シェイクスピアは落ち着かない表情だったが、次第に打ちのめされ、青ざめていく。

「こんなものを、俺は書いたのか。どうやったたら、こんなものが書いたのか……」
後方の席で夢中になっている若い女性。その横にはサウサンプトン伯。伯も魅入られている。しかし、観客の中には退屈して眠りそうになったり、秘かに席を立ち後方であくびをしたりする者も。一方、先ほどシェイクスピアに視線を向けていた青年は目を輝かせ、舞台に集中している。王は、妙齡の婦人の反応を気にしている。婦人は王の視線に気づかない。彼女も劇に熱中しているのだ。
劇は続く(フェイドアウト)。

9 舞台の終わり。シェイクスピアは呆けたように座り込んでいる。しかし、国王が席を立ったので、立ち上がる。深々とお辞儀した後、再び座り込む。

女性の声が聞こえる。

「ロミオ、ロミオ……」

シェイクスピアは驚いて、我に返る。

「あなたはなぜロミオなの？」

立ち上がり、後方に向き直るシェイクスピア。かつて愛し合った女性が二十年の後、さらに美しさを増してそこにいた。

「ヴァイオラ」

「ウイリアム」

見つめ合う二人。

「ウエセックス公は病気で亡くなられたと聞きました。その後もアメリカに留まっていたのですよね？」
うなづくヴァイオラ。

「運命の気まぐれで、不運にも幸運にもたくさん出遭いました」

「私も同様のようです」

ヴァイオラはシェイクスピアの顔を見つめる。

「あなたは十二夜という劇で、ヴァイオラの乗った船を難破させたでしょう？」

「ええ。けれどヴァイオラは助かり、最後に幸福を得ます」

微笑えみを交わす二人。

「アメリカから、こちらに戻ることにしたのですか？」

「いいえ。しばらくの滞在です。良い船があれば戻ります。あちらに家族を残しています」

「家族？ ウエセックス公が亡くなった後に再婚をした？」

ヴァイオラが答える前に、近づいて来た青年が声を発する。

「母上」

驚くシェイクスピア。

「ご紹介ください」

「ミスター・シェイクスピア、息子のリチャードです」

「ミスター・シェイクスピア。母から、ロンドンの演劇がどんなに素晴らしいか、何千回も聞かされてきました。名台詞の数々を交えて。けれど、こちらで見た実物は想像を超えていました。中でもハムレット、悲劇という夜空に輝く、月の光にも勝る宝石です。ミスター・シェイクスピア、あなたに会えて光栄です」

微笑むヴァイオラ。

「芝居好きの血が受け継がれたようです」

「芝居好きの血……？」

「もちろん、私の血です」

シェイクスピアはリチャードの顔を見る。

国王の従者が近づいて来る。

「ヴァイオラ様、国王陛下がお呼びです」

会釈して立ち去ろうとするヴァイオラ。

「どちらに滞在していますか？」

ヴァイオラは一瞬だけ振り返る。

「実家におります」

10 宮廷から人々が去っていく。シェイクスピアはフレッチャーを見つめる。国王一座の重役と話している。シェイクスピアはそのまま立ち去ろうとする。

ポーモントが華やかな身なりの女性と近づく。

「ミスター・シェイクスピア、先日は私どもの芝居にお越しくださったとのこと。ありがたく存じます」

うなづくシェイクスピア。

「お気に召しましたか、などとは口が裂けても申しあげられません。今日の素晴らしいハムレットを見た

後では」

シエイクスピアは女性を見る。

「こちらは？」

「婚約者です。間もなく結婚いたします」

「フレッチャーとはカッブル……コンビを解消か？」

「そうです。私は芝居の世界から離れます」

フレッチャーと婚約者が顔を見合わせる。微笑む婚約者。

「脚本書きをやめると？」

「未練はありません。ミスター・シエイクスピア、私はあなたに憧れて芝居の世界に入りました。経験を重ねて分かったのは、フレッチャーと力を合わせても、到底ハムレットのような芝居は書けないということでした」

「君らの悲喜劇は、大層人気がある。客の受けなら、ハムレットに優るだろう」

「人気をあてに右往左往する人生は終わりです。十分堪能しました。つい先日、国王一座から、私どもに依頼がありました。なんとドン・キホーテを題材にせよとのご注文。ドタバタ喜劇がご所望というわけです。フレッチャーは引き受けるつもりです。またとないチャンスだからと。私は、芝居から足を洗う決心をしておいて良かったと思えました。下卑たおちゃらけ芝居と関わらずにすみませうから」

シエイクスピアはフレッチャーの方をうかがう。フレッチャーもシエイクスピアに視線を向ける。

「私はそろそろ引き上げよう」

「お引き留めしました。芝居人生の最後に、尊敬するミスター・シエイクスピアと共にハムレットを見ることができたこと、生涯、忘れません」

シエイクスピアは小さく手をふりつつその場を離れる。

11 夕暮れ。賑やかな居酒屋。カウンターで一人飲むシェイクスピーア。壁には夭逝した劇作家クリストファー・マーロウの肖像。居酒屋の老店員とマーロウの昔話をするシェイクスピーア。フレッチャーが現れ、シェイクスピーアに挨拶する。フレッチャーもマーロウの話に加わるが噛み合わない。沈黙の後、フレッチャーは、シェイクスピーアの気分を害することを恐れて、ためらいながら共作の話を持ち出す。

「国王一座の公演という晴れの舞台にお力を貸して欲しいのです」

「ふむ。そういうことか」とシェイクスピーア。「フレッチャー、私はもう芝居は書かないのだ」

「ポーモントから何かお聞きになりましたか？ 彼は、ミスター・シェイクスピーアに憧れる余り、筆を折るところまで真似しようとしています」

「ポーモントは清清していたぞ」

「婚約者の実家は大金持ちです。さぞ気分がよいことでしょう」

「そういう意味ではない。彼は注文されたドン・キホーテをやらずにすむことを喜んでいたので」
フレッチャーはひるんだ表情になる。

「よりによって、ドン・キホーテとは！ 読んだことではないし、読みたくもない。金だらいをかぶった頭のおかしい騎士と、豚飼いの従者の馬鹿騒ぎだというではないか。もし筆を断っていなかったとしても、たとえ国王陛下からの直の命令であったとしても、ミスター・フレッチャー、私はドン・キホーテを芝居にするような馬鹿な真似はしない。決して、決して、だ」

シェイクスピーアは席を立つ。フレッチャーは後を追おうとして諦める。

12 夜。ヴァイオラの実家。かつて通った裏口からヴァイオラの部屋のバルコニーの前に行く。シェイクスピーアが声をかける。

「ジュリエット」

しかし、顔を出したのは年老いた乳母だった。

「ミスター・シェイクスピア。玄関にお回りください。奥様とリチャード様がお待ちです」

訪問の約束はしていないが……つぶやきつつ玄関に行くシェイクスピア。リチャードが前に立ち、ヴァイオラは後方で微笑んでいる。

©2021 レワニワ書房